

＜各グループからの主な意見＞

- 県内において同一ドメインでGoogleの教育向けサービスが利用できる環境が整えられ、一人一人の子供がIDを取得したことが奈良県の学校教育にとって画期的なこと。クラウド上で自分のIDを使い、小学校1年生から中学校3年生までの学びの蓄積が可能になったことが大きく、今後の発展につながる。

- 指導環境については、教育研究所の約200あるICTに関する研修がありがたい。また、教員がリアルタイムでも動画配信サービスでも視聴可能という配慮が心強い。今後は、県域全体で教科別等細部の指導のモデルを作っていただきたい。

- 県域でのICTの推進が、各市町村において、子供たちが学校でも家庭でも、自分のスピードや能力に合わせて学習ができる教育の個別最適化の推進につながった。

- どうしても教え込むことに力を入れがちになるが、本当に大事なこととして、教え込むのではなく育てていくことを現場の教員が理解していかなければいけない。

- ICTの導入で、1人の子供に対して、色々な人が様々な立場から多角的な見方ができるようになり、多様な意見をぶつけ合って発育を支えていくことが、リスクの分散化にもつながる。

- これからの教員には、AIに任せることができない人間力のような、カウンセリング能力やアドバイス力が求められるのではないか。

- 小中学校の連携、幼稚園との連携などというが、同一市町村内の学校だけではなく、広く奈良県内の連携というものも考えられる。

- 学ぶ力、生きる力については、子供たちの学びが生きている、生かされているということを経験させることが大切。

- 学ぶ力、生きる力を子どもに育むときに、育む側である大人の生きる力も大事。

- 教員主導で知識を一斉に与える従来の受け身の授業から、子供たちが主体的に学んでいく授業に転換していくためには、1人1台端末を生かした学びが重要になってくる。

- ICT環境の整備が加速化し、スピードを求められる時代にスピード感のある教育が求められるようになってきた。しかし、確実に根っこの部分を鍛えていくというような手間隙をかける教育も大切であり、両立を目指さなければならない。

- 教育は顔を見ながら温もりのある対面が本来であるが、時代が変わってきた。しかし、オンラインとリアル対面の使い分けはしっかりとしなければならない。

- 学校には新しい課題がどんどん入ってきており、教員が非常に多忙化している中で、働き方改革は大切である。教科担任制も一つの選択。
- この町に住んで欲しい、義務教育等が終われば町外・村外へ出て行くのではなく地元に残って欲しい、という強い思いがある。地域のリーダーの育成も大切だが、地域の構成員を育てていくことも大事。
- 子供たち一人一人が地域を愛し、地域で生まれ育まれ、自尊感情を大切にしていることが大切である。
- 県の大綱に基づいて市町村が作る教育大綱。そして、各学校が作る指導方針に基づく教育目標、これらを明確に立て、検証しながら進めていくことが大事。
- 子供の持てる力、すでに持っている力をいかに健やかに伸ばしていくか。これまでの教える教育も大事だが、教えない教育も大事ではないだろうか。
- 知識の注入だけではなく、知識を生かすという学びの方向や体験活動を重視して、知識と体験活動の調和を取った教育を進めていくことが大切。そのベースとなるのは心の教育である。
- 生きる力については、ときに心に小さな傷がつくことも教育上大事ではないか。近年は、どんな傷をもつけないように大切にしているのではないかと感じている。小さな傷を自らが治していくことが、大きな傷に負けない、自立した子供を育てることになる。
- 大綱の中でもインクルーシブ教育の充実について掲げられているが、市町村では、就学前からの取組、保護者への意識改革の働きかけ、教員の確保や育成が大きな課題。
- 県の教育振興大綱は、これからの教育について大変よくわかる大綱になっている。県内に広く、多くの住民の方に啓発していく事も大事。
- 地域への貢献として、地域の祭りへの参加、桜の植樹、伝統文化の獅子舞への参加など、繋がりを大切にしながら、地域から学ぶことも多くあると思う。
- バーチャルな世界ではなく、現実に目の前の地域の人たちと関わり、農業や、地元産業の方々と深く繋がる中ですばらしさを教えていくことが、今後生きる力を育む上で重要。
- ICT教育では、Wifi環境の問題等、様々に負担があり、いろいろな家庭がある中で、子供の学力に差が出るということは避けなければならない。
- 学習データの積み上げだけでは、何の力にもならない。どう分析して、どのように次の

学習に返しながら進めていくのかも大きな課題ではないか。

- コロナ禍の中で、工夫を凝らして運動会や文化祭が行われたことが、すでに新しい学びに繋がっている。
- 今後は、家庭教育や学校教育のそれぞれの役割が明確にされていくだろう。特に家庭教育の役割が注目されていくと思われる。
- 学校では規律を守ることが大事だと教えていて、そのルールは大人が作ったものであるが、これからは子供たち自身がルールを作っていく時代になっていくのではないか。

<総括>

- 首長がつくる大綱とはどういうものになるのかを考えている。教育の地方分権化ということかもしれない。
- 首長がつくるということは、教育委員会との関係があることを思うと、本日のサミットで、首長が考える教育への願いを教育長とも共有できたのではないかと思う。
- 県の大綱では、2ページに記載されているとおり、「本人のための教育」が一番大事と考えている。
- 位置付けとして、知識は教育の基であるが、知識だけでは生きる力にならない。知識の活用の仕方をどう教えるのかが学校や社会の役目だと思う。
- データは、情報化して知識にして、知恵に結びつける必要がある。
- 地域とどう関わるかという地域展開については、子ども食堂などの教室外教育が首長の一つの役目かと思う。
- ICTの関係で、設置予定の県大の工学部系学部では、高校との接続が課題の一つ。
- ICTには、「学ぶ」と「利用」の2つがあり、学事と学務の両方に使える。
- 教えることにICTを活用する際には、例えば英語学習において、スーパー教師が授業を行うことも可能だが、そのとき身近にいる教員に必要なのは学ぶ手助けをする力である。
- ICTは、生徒と教える側との関係を円滑にする他に、学校と家庭を結び付けることにも利用できる。子供の学ぶ姿を家庭で見てもらい、家庭に教室を持ち込むような役目も考えられる。